

トルコ語にみられる主題について *

栗林 裕
(岡山大学)

Topics in Turkish

KURIBAYASHI, Yuu
Okayama University

In this paper, we discuss the phenomenon of topicalization, based on research results in Japanese, and whether the same concept can be applied to Turkish, paying attention to definitions in both languages. In the process, we present a new phenomenon that we believe is related to topicalization in Turkish. In conclusion, we argue that in a language such as Turkish, which emphasizes communicative aspects in which the definiteness is incorporated into nouns and conveyed throughout the discourse.

キーワード：主題，主題化，トルコ語，日本語，限定性

Keywords: topic, topicalization, Turkish, Japanese, definiteness

1. はじめに
2. トルコ語の主題化
3. トルコ語の主題化の多層性
4. おわりに

栗林裕. 2024. 「トルコ語にみられる主題について」. 児倉徳和・佐藤久美子（編）. 『チュルク語文法の諸相 2：情報構造・知識管理』. pp.111–126. <https://doi.org/10.15026/0002000302>



本著作物はCreative Commons Attribution 4.0 International Licenseの下に提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

* 本稿は2022年3月29日に2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」のオンラインでの発表内容の一部を修正・加筆したものに基づく。2名の査読者から有益なコメントを得た。また編者の方々から構成に関わる建設的なコメントをいただいたことにも感謝したい。本稿は科学研究費16K02676, 18H03578, 23K00524および令和2年度～令和3年度東京外国語大学AA研共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理－音韻・形態統語・意味のインターフェイサー」による研究成果の一部である。

1. はじめに

本稿では主題化という現象を巡って、言語間の対照を念頭に日本語の研究の中で議論されてきた主題の意味的な定義が、トルコ語でも適用可能なのかどうかについて考察を進める。その過程でトルコ語において主題化が関連すると考えられる累加を意味する *dA* を伴う名詞が後置される現象や、*dA* の非典型的な機能を新たに提示する (*dA* の *A* は *e~a* の母音交替を示す)。トルコ語の参照文法で主題 (Topic) という概念が初めて包括的に扱われたのは、1980 年代になってからである。Erguvanli (1984: 38) では、主題とは「語用論的機能を果たすさまざまな名詞句」としている。参照文法における統語的な観点からの主題化とは、左周辺部である文の先頭位置にきて「それについて、何かを述べる」ものであり、動詞の直前になる焦点になる要素以外、どのような要素でも主題になるとされる (Göksel & Karslake 2005: 400)。2000 年以降のトルコ語の生成文法の枠組みによる理論的研究 (Göksel & Özsoy 2003, Kornfilt 2005, Öztürk 2013, Özsoy 2018) では、右周辺部である述語に後置される要素 (Post Verbal Constituents: PVC) も後景化された既知要素 (主題) であると分析され、また *dA* や *ki* などの後置詞的な形式が名詞に付加され主題を表す場合もあるという見方もとられるようになってきた。これらの先行研究では文頭や文末などの語順や *dA* や *ki* などの形式などのさまざまな要素が「主題 (の標識)」を表すとしている。これらはいずれも「主題」を表すといっぴよいのか、特に統語的位置の異なる文頭と述語の後の要素 (PVC) はどちらも主題を表すとみてよいかという問題がある。どのような条件のもとで主題の表示が生起するのか、意味的な主題と統語的位置による主題との関連は十分に明らかにされているとはいえない。

本稿では、まずトルコ語の意味的な定義と形式的な定義に分けて先行研究を概観した後 (2.1, 2.2)、後置詞 *ki* を伴う左方転移¹による主題化、節の右側主要部の関係節化や PVC の分析を通して文と節の右周辺部と左周辺部の要素が主題化という概念で結びつき、人称表示などの形態的複雑さ (complexity) がその成立にも関与することを述べる (3.2)。次にトルコ語では主題と深い関わりを持つ限定性 (definiteness) が頭在的あるいは潜在的に名詞に組み込まれることに基づき、両者の体系的な分類を行う (3.3)。トルコ語の主題化の全容は、文内の主題の意味的な定義だけでは捉えることができず、形式と意味と統語的語順のそれぞれの側面からの関連を明らかにしていく必要がある。例えば、後置主題化 (PVC) などの統語的操作により数量詞の遊離も許されることは、主題化が数量詞の配列の制限などの文法規則より重視 (override) されることを示している (3.4)。さらに非典型的な *dA* 付加構文を提示してトルコ語の主題は文内だけでなく文外である談話の主題

¹ 本稿では転移 (dislocate) と移動 (move) を区別して用いる。転移は主に表面的な要素の再配置を指し、移動は特定の理論的枠組みに基づく場合の要素の派生を意味する。

とも深い関わりを持つことを新たに指摘し、言語類型の側面からも限定性を中心にした談話の主題としてのさらなる考察の必要性を主張する (3.5)。

2. トルコ語の主題化

以下の節では 2.1 で主題の意味的な観点からの定義を確認した後、形式的な観点から順に 2.2.1 で分節形式、2.2.2 で韻律、2.2.3 で語順の観点から分類して考察する。

2.1. 意味的な観点

主題に関する意味的な定義として、文主題 (sentence topic) と談話主題 (discourse topic) が区別されるが、以下は Lambrecht (1994) による文主題の意味的な定義である。

TOPIC: A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is construed as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases the addressee's knowledge of this referent.

(Lambrecht 1994: 131)

この定義は前述した Erguvanli (1984: 38) により導入されたトルコ語の意味的な定義と重なるところが多い。一方、日本語では明示的な主題表示「ハ」が存在するため主題の認定に関して大きな困難はないが、トルコ語ではそのような主題のみに特化した明示的な形式（形態）がないため、主題という文法カテゴリーがそもそも適応可能かどうかが問題になる。トルコ語と日本語の違いを確認するために、日本語文法では意味的な観点から分類される、1) から 3) のような主題²の分類を当てはめると、トルコ語ではいずれの場合も主題表示はゼロ表示されるので注意が必要である。近年のトルコ語の分析でも「関連性の主題」という用語が使用されることがあるが、この用語が意味するところは文中の左周辺部の名詞が述べ立てる場合に主題になることを含むもの (Gürer 2020: 566) とされる。従って、日本語の主題の「関連性の条件」(Aboutness Condition) との関わりで議論される主題 (岡山は桃が美味しい。) の「関連性」とは異なるものである。また、「二重主題」という用語がトルコ語の分析の中で用いられることもあるが (Kamali 2011)、具体例については 2.2.2 で提示する。トルコ語の「二重主題」と、文中で主格の名詞が連続する日本語の二重主語構文 (岡山が桃が美味しい。) とは直接的には関係がない。また、対比の主題 (桃は好きだが、ブドウは嫌いだ。) については 2.2.1 と 2.2.2 で述べる。

² 日本語の主題については、Masuoka (2017) において主題の研究史を含めた現時点での包括的な概観がなされている。関連する例文や文献についてはそちらを参照のこと。

トルコ語での主題の分類	形式の対応
1) 関連性(Aboutness)の主題	ゼロ表示 Gürer (2020)
2) 対比の主題	ゼロ表示 Erguvanlı (1984)
3) 二重主題	ゼロ表示 Kamali (2011)

本節ではトルコ語の分析の中で用いられる主題に関する意味的な分類を整理したが、いずれもゼロ表示形式で対応することを述べた。

2.2. 形式的な観点

2.2.1. 分節的形式

トルコ語では形態的な観点から主題が明示される場合もあり、具体的には主題になる名詞などに接語 *dA* (～も, ～は) や *isE* (～ならば) が付加されたり、後置詞である *geline* (～については) が後続する。これらは共通して取り立ての機能があるが、主題が変わる場合に主題転換子 (topic shifter) として形式的に明示される。

これらの中で、トルコ語の主題のマーカースとされる接語 *dA* には、継続 (Continuative) / 話題転換 (Topic-shifting), 接続詞 (Connective), 累加 (Additive), 反意 (Adversative), 列挙 (Enumerating) などのさまざまな機能がある。伝統的には、接語 *dA* は代名詞や副詞の後にきて強調の機能をもつとされてきた (Lewis 1967: 207)。また機能文法的な分析の枠組みでは (1) のように *isE* や *dA* は対比の意味をもつ強い主題 (strong topic) であるとし (Erguvanlı 1985:38), また理論的な方向性の研究では対比の意味をもつ *dA* の研究が活発に行われてきた (cf. Göksel & Özsoy 2003)。また、取り立て表現としての記述的な研究もなされている (cf. 林 2019)。

- (1) Bu hediyе-yi de Envér al-dı.
 this present-ACC alsoE. buy-PST
 ‘As for this present, Enver bought it.’

(Göksel & Karlake 2005: 110)

2.2.2. 韻律的な観点

一般的にトルコ語で主題は、しばしば主題転換子を伴い文頭に来て二次的強勢を受けるが、動詞より後置された要素 (PVC) は強勢を受けない。主題を表示する主題転換子と主題は若干上昇する音調句を形成する (Göksel & Karlake 2005: 396-7, 402)。主題転換子として文頭に現れる場合と、文末に現れる「対比」の主題の実例を確認する。(2a) は文頭の対比の主題の例 (non-focused element) であり、(2b) は動詞より後置された要素 (PVC) が対比の主題を担う例である。後置された要素については 2.2.3 で議論を行う。

- (2) a. [Anne-si-yile de]CT Ahmet bugünlerde [hiç]F
 mother-3SG.POSS-COM dA Ahmet nowadays at all
 anlař-a-mı-yor-muř.
 get along-PSB-NEG-PROG-EVID
 ‘As for his mother, Ahmet can’t get along at all with her nowadays.’

- b. Ahmet bugünlerde [hiç]F anlař-a-mı-yor-muř [anne-si-yile de]CT
 (Göksel & Özsoy 2003: 1148)

Kamali (2011) では二重主題を認めて、韻律との関連を指摘している。(3a) は文中にでる主題が一つの場合であり、*Ali* の語の後半からピッチの上昇がみられるが、(3b) は文中で *Ali* と *Bugün* の二つが主題になっている場合であり、二つ目の主題である *Bugün* の語の後半から顕著なピッチの上昇がみられるとする (Kamali 2011: Fig. 5.1-5.2)。

- (3) a. (主題が一つの場合)
 Ali bugün milyoner oyna-dı.
 Ali today monopoly play-PST
 ‘Ali played monopoly today.’

- b. (主題が二つの場合)
 (Ali)IP (bugün)IP milyoner oyna-dı.
 Ali today monopoly play-PST
 ‘As for Ali, as for what he did today, he played monopoly.’ (Kamali 2011)

2.2.3. 統語的な観点 (語順)

トルコ語の生成文法の枠組みによる理論的な分析 (e.g. Göksel & Özsoy 2003, Kornfilt 2005, Öztürk 2013, Özsoy 2018) では後置された主題 (Postposed Topic) として、動詞や述語の後の領域も主題の出現する位置としている。主題要素が動詞の後に要素を転移することは、口語を中心とするくだけた書き言葉でのみ可能であり、形態的に明示することも可能である。機能主義的な分析 (e.g. Erguvanlı 1984: 50) では伝統的に背景化あるいは後景化 (backgrounding) とされ、話者と聞き手に共有された情報や談話上すでに導入された要素が該当し (Göksel & Karlake 2005: 398), 定である限定された名詞や副詞がもっともよく後背景化される (大文字で示された部分はピッチが高くなることを示す)。

(4) GüZEL-miş bu evi.

「いいねえ、この家！」

(Göksel & Karlake 2005: 398)

日本語と比較して特徴的な点は、さまざまな語順で複数の要素が後景化され、その場合、述語には必ず強勢が置かれる点である。以下の例では述語が文頭にきて強勢を担い、後続する要素が自由に並び替えられている。日本語では述語に後続する要素は、口語でもかなり制限を受け、適切な文脈がなければ受け入れられないことが多い。例えば、(5) の日本語では、主に思い出し (after thought) として付け加えるような状況以外では使えない。なお、トルコ語での思い出しの構文は述語と後続する形式との間に軽い休止を伴い、後景化の下位分類として位置付けられる (Erguvanlı 1984: 51)。

(5) a. Bitir-Dİ Fatma üniversite-yi bu yıl.

「終えたよ、ファトマは大学を今年。」

b. Bitir-Dİ üniversite-yi bu yıl Fatma.

「終えたよ、大学を今年ファトマは。」

c. Bitir-Dİ bu yıl Fatma üniversite-yi.

「終えたよ、今年ファトマは大学を。」

(Göksel & Karlake 2005: 398-399)

動詞や述語の後にくる要素には、主節の主語が多いが、他の要素も転移される。

(6b) では従属節中の属格主語 (6a) が文末に転移されている。

(6) a. [Ayşe'nin Piyano çal-dığ-ın]-ı bil-mi-yor-du-m. (転移前の構造)

A.-GEN piano play-PRT-POSS.3SG-ACC know-NEG-PROG-PST-1SG

「[アイシェのピアノを弾けること]-を知らなかった。」

b. [(...) Piyano çal-dığ-ın]-ı bil-mi-yor-du-m Ayşe'nin.

「ピアノを弾けることを 知らなかった、アイシェの。」

(Göksel & Karlake 2005: 403)

ここまで文中要素の配列に関わる統語的観点から主題化の特徴をみたが、これらが主題であることを示す形式的な表示である主題転換子について 3.4 でさらに考察する。

2.3. まとめ

本節では、トルコ語において主題化の概念がどのように適用されているのかを述べた。まず、トルコ語では主題の専用形式はなく、通常は文の一番最初の要素

が主題になり、特別な韻律的特徴を伴わない。分節的形式の観点からいうと対比を示す主題転換子が対象となる主題を表す場合に部分的に主題表示の役割を果たし、韻律的特徴を伴う。また述語よりも後置された主題の場合は、述語に対して韻律的特徴がみられ、名詞、副詞、従属節などが右周辺部に生起する。つまり主題を示す専用形式を持つ日本語とは異なり、日本語の主題に相当するものは、主題転換子を含め、語順や音調などさまざまなレベルで実現される。これらはいずれも同じ「主題」を表すといつてよいか、特に文頭と述語に後置された要素 (PVC) はどちらも主題を表す、とみてよいのかという問題がある。なぜなら、意味的な観点からすると文内主題として扱うことができないからである。

トルコ語文法の中で主題という概念がそれほど顕著な役割を果たしていない事実は、参照文法の中でも 1980 年代まで取りあげられることがなかったことから明らかである。トルコ語では語順が限定性を表現する上で重要な役割を果たすので、述語の後の位置を日本語よりも自由に利用するのはトルコ語の特徴といえる。さらに述語に向かって語順に基づく単に左方から右方へ定から不定への漸次的な線的な変化だけではなく、述語に後続した文末要素が主題としての機能を担い重要な役割を果たすことは、生起する文末要素は定であるという限定性に関わることをみた。

3. トルコ語の主題化の多層性

前節 2.2.2 では、トルコ語の述語の後に後置される要素 (PVC) が主題のマーカーを伴うことがあるので、文頭だけでなく述語に後続する領域も、主題が現れる位置であるとするための一つの根拠であることを論じた。本節では、主題は文頭位置に転移されるという一般的な理解と、主題が述語末に転移されるという前節での結論を結びつける根拠について、主題化と関係節化にみられる転移の関わりを論じ、トルコ語では 2.1 で述べた文内主題に基づく意味的な主題のみの定義では十分に扱えない多層的な性質をもつことを述べる。

3.1. 主題と言語の種類

さまざまな言語における主題は、主語優勢型言語か主題優勢型言語かに二分される (Li & Thompson 1976)。トルコ語は主語との一致を持つ言語なので主語優勢型言語のカテゴリーに入るが、一方で日本語は主題を表す専用形式をもつが主語との文法的一致はなく、主語性については印欧語にみられるほど顕著ではないので、主題優勢型言語と考えられている。また近年では伝達の側面の主題と認知的側面の主題を区別する考え方も出てきている (Masuoka 2017: 119)。簡単にまとめると、認知的な主題とは属性叙述という叙述の類型に根ざすものと考え、これに対して、伝達的な主題とは焦点との関連において取り扱われ、情報の新旧が問題にされる。この分類に従うとトルコ語の伝達的な主題の側面も無視できない。

Subject prominent (Tr) (主語優勢型)	vs. Topic prominent (Jp) (主題優勢型)	(Li & Thompson 1976)
Communicative topic (Tr) (伝達型主題)	vs. Cognitive topic (Jp) (認知的主題)	(Masuoka 2017)

3.2. 主題化と関係節化

言語の関係節化と主題化はコインの表裏関係に似ている。VO 言語での主題化とは取り立てられる限定性を持つ名詞が文中の左周辺部にくるのに対して、OV 言語での関係節化とは修飾する節の右周辺部に、修飾節により限定された主要部となる名詞がくることになり、ちょうど主題化とシンメトリーな構造を形成する。久野(1973: 158)は、変換文法の枠組みで文法性の判断に基づく分析に依拠しながら、日本語での文の主題の構文的特徴と関係節の構文的特徴との類似性をあげ、『関係代名詞化される名詞が、普通の格助詞を伴った名詞句ではなくて、関係節の主題、すなわち「名詞句+ハ」である』という仮説を提出している。記述文法の枠組みでは、久野による分析以外に主題化について関係節化との関わりを指摘した研究はあまりない。したがって、主題の問題を追及するために少し異なる角度から関係節化との関わりをみていく意義があると考えられる。OV 言語であるチュルク諸語には統語的に二つの種類の関係節化が許容される場合があり、このような分析の検証には有効な基盤がある。

トルコ語での主題化は、構文として主要部前置型の関係節と主要部後置型の関係節が認められる。出現位置の観点からは、左周辺部に主要部が生起する場合と右周辺部に主要部が生起する場合というように一般化することが可能である。またトルコ語での主要部後置型の関係節化のターゲットは主語や目的語などの述語と文法関係を持つ名詞である必要があり(内の関係: Gapped)、そのような関係を持たない場合(外の関係: Gapless)は関係節化が成立しない。しかし、カラチャイバルカル語など一部のチュルク語は後者を許すことがあり、以下の(7)ではその点にも着目する。述語により修飾される主要部名詞と、主題化され取り立てられる名詞と述語の構造は鏡像構造を形成する。これを主題化構造と名詞修飾(主要部後置型の関係節化)構造のシンメトリー構造として捉えることができる。

主要部前置型 (文頭主題)	主要部後置型 (名詞修飾)
Tr: [Top [...Pred-core...]]	↔ [[...Pred-core...] AGR ³ NP]
Jp: [Top [...Pred-core...]]	↔ [[...Pred-core...] non-AGR NP]
Top=topic, Pred-core=predicate core, AGR=agreement, NP=head noun	

³ ウイグル語などの一部のチュルク語では、述語ではなく主要部名詞にAGRが表示されることもある(Menij yazidiġan kitab-im 「私の書いた本」)。

素は全く関係がないので最も簡素であるといえる。図式化すると以下のようになる。

Tr:	[[NP-GEN	...Pred-core...	AGR	NP]	complex
KB:	[[NP	...Pred-core...	non-AGR	NP]	↑↓
Jp:	[[NP-TOP	...Pred-core...	non-AGR	NP]	simplex

Tr=Turkish, KB=Karachay-Balkar, Jp=Japanese

このように左周辺部の要素は、右周辺部の関係節化による主要部名詞や右周辺部のPVCと「主題」という概念で結びつくことが可能である⁴。トルコ語の主要部後置型の関係節化による右方転移は日本語の主要部後置型の関係節化による右方転移と表面的には類似しているが、久野によれば日本語の右方転移された要素は主題であるのに対し、トルコ語の右方転移された要素はそもそも述語と文法関係のある要素（内の関係）しか転移できず、さらに述語との間に一致が維持される点でLi & Thompson (1976) のいう主題優勢型言語のカテゴリーに属する主題ではない。しかし両言語に共通するのは、何らかの意味的な関係性が主要部と述語の中核部分や、周辺部と談話の文脈の間に成立していなければならないという点である。この関連性に深く関わる概念が限定性であり、次節で検討する。

3.3. 主題と限定性

ここで、主題に関わるトルコ語の限定性 (definiteness) についてまとめておく。トルコ語やチュルク諸語では限定性の表示が顕在的になる場合と、潜在的になる場合がある。顕在的に限定性が表示される場合とは、属格が付加される名詞はそれ自身の限定性が高く、またチュルク諸語の対格表示は限定性と深い関わりがあり、名詞自体の意味や文脈からの影響により限定性は高まる。さらに名詞に人称接辞が付加される場合は、その名詞の限定性は高いといえる。それに対して、限定性が潜在的になる場合とは次のような状況が考えられる。語順は一般的に左の要素ほど限定性が高いが、受動化や右方転移などの統語操作により語順は変えられるので文中要素の限定性は変化する。また指示代名詞は名詞そのものが意味的に限定されており、何か特別な表示がされるものではない点で限定性は潜在的であるといえる。また、限定性が高いものは文脈から復元可能なので省略されやすくなる。限定された名詞類は繰り返し談話の中であらわれることにもなるので、主題化されやすく計算機などによる主題の探査においては出現頻度などの指標が用いられる。しかし、これらは傾向であって、繰り返しあらわれることと限定性の高さは必ずしも一致しないことがある。なぜなら、話者の共感度などの他の要

⁴ トルコ語の生成文法の枠組みによる理論的な分析においても左周辺部とPVCでの右周辺部の要素は、同じ扱いを受けてCTあるいはTPへの付加であり統語部門での移動であるとする立場もある (cf. Kornfilt 2005, Öztürk 2013)。

因により、繰り返し現れていても省略されないこともある。つまり、頻度が絶対的な指標にならない場合もあることに留意する必要がある、文内の要因からも文外の（談話的）要因からも影響を受ける。

限定性表示の方略

- 1) 顕在的な表示 (*overt marking*): 節や句の属格名詞, 対格名詞, 人称接辞, 分格名詞 [文内の要因]
- 2) 潜在的な表示 (*covert marking*): 語順, 指示代名詞, 被修飾名詞 [文内の要因]
- 3) 他の方略: 省略, 主題の連続性 (Givón 1983) [文外的要因]

以上の点を踏まえてトルコ語の主題化の分類をすると、主題のみを表示する顕在的な専用形式はないが、形式が顕在化して主題とされるものがある。いわゆる取り立て表現と称される主題転換子 (*topic shifter*) の接語 *dA* や条件を表す *-isE* は主題のみの専用形式ではないが、顕在的に主題を表示する形式である。

- 1) 顕在的主題 (*overt topic*): *dA* (～も), *isE* (～なら) …
- 2) 潜在的な主題 (*covert topic*): 主語編入 (*subject incorporation*)

また潜在的な主題には形式的な表示は付加されないが、ピッチや強勢が目安となり、述語と近接する語順により示される場合もある。(8) では元の主語である *polis* (警察) が後景化され、動詞と一体化しているため自動詞主語の編入とされる (Erguvanli 1984: 159)。このような方略は談話の中で、後景化の必要に応じて生じることもある。トルコ語での編入とは名詞と動詞が一体化して単一の動作を示す場合を表し、目的語の編入が最も顕著にみられる。その場合、編入される名詞は [*-human, -definite*] の特徴を持ち、名詞と動詞の結合は名詞の後に *dA* や *bile* などの一連の取り立て表現以外の挿入を許さないで、形態的な緊密性を保持している。

- (8) *ev-e polis gir-di.*
house-DAT police enter-PST
 「家に警察が入った。」

(8) では文脈により、談話上の潜在的な主題が述語と一体化することで編入という統語の方略が関与しているということを示している。

3.2 ではトルコ語の右方転移による名詞修飾は日本語の右方転移による関係節化と比較して述語との特定の文法関係 (*Gapped RC*) が維持されて、*AGR* が必須であるという点において Li & Thompson (1976) の類型化における主題優勢型言語の特徴を持っていないということを見たが、本節 3.3 でみたように、トルコ語の

右方転移をはじめとして主題とされる要素は限定性が深く関わっており、Lambrecht (1994) の「主題は旧情報 = given である」という意味的な主題の定義によれば、トルコ語の名詞修飾による右方転移もまた主題であるといえる。

3.4. 主題転換子と数量詞遊離

主題転換子が付加された名詞が主題であることの根拠として、動詞や述語の後にくる接語 *dA* とそのホストが主題であることを指摘することが出来る。(9) では後置された要素に形態的な主題表示要素である接語 *dA* が付加されており、文末への転移は主題化の一つであることがわかる。

- (9) Ders-lerin-i yap-ma-mış-lar.
 homework-POSS.3PL-ACC do-NEG-EVD-PL
 Onlar-ı UYAR-DI-M ben de.
 they-ACC warn-PST-1SG I dA

「宿題をしなかったようだ。あの子たちに注意した、だから私は。」

(下線は筆者) (Göksel & Karslake 2005: 401)

主題化と数量詞の名詞句修飾構造において、数量詞と修飾される名詞が離れる数量詞遊離との関連も興味深い。2.2.3 では述語の後に転移された構成素は主題化の一部でもあることを論じたが (cf. (6)), そのことは数量詞遊離とも関わる。トルコ語では名詞修飾での数詞の位置は被修飾名詞の前部に固定化しているとするのが参照文法の一般的な見解であるが (Lewis 1967: 54, Göksel & Karslake 2005: 208-9), (10a) において動詞の後に転移された数量詞「一二匙の」は、もともと (10b) のように文中の要素の「砂糖」と関係づけられており「トルコ語では名詞修飾での数詞の位置は被修飾名詞の前部に固定化している」という参照文法での記述的一般化への反例になる。つまり、後置主題 (右方転移) などの操作により数量詞の遊離も許されることがあるといえる。

- (10) a. Bütün zeytinyağlı-lar-da şeker var-dır bir iki kaşık.
 all olive oil-PL-LOC sugar exist-MOD one or two spoon
 「すべてのオリーブオイルの前菜には砂糖が含まれている、一二匙の。」
 (Göksel & Karslake 2005:402)
- b. Bütün zeytinyağlı-lar-da bir iki kaşık şeker var-dır.
 「すべてのオリーブオイルの前菜には一二匙の砂糖が含まれている。」

語順の観点から前部修飾要素と後部被修飾要素が固定している名詞修飾構造で前部修飾要素である数量詞が述語の後に話題転換子と同様に置くことができることは、話題転換子の機能と共に、語順を広く活用して情報構造を反映する方略をト

ルコ語が持つことの側面を捉えている。本節 3.4 では文頭の子題だけでなく、動詞後置の子題にも注目することで、述語よりも前の領域で生じる子題化では通常は許されないとされる数量詞遊離が許されることもあることを示した。

3.5. 主題のdAの機能

主題の *dA* には、今までに指摘されていない次のような機能がある。A と B の二人が会話をしているという状況で、B は *Ahmet* (男性固有名) のことを全く知らない (会ったことも聞いたこともない) という状況において、B は代名詞の後に接語の *dA* を付加することが出来る。また、(11b) のように *dA* を付加しなくても文法的適格性には変わりはない。(11c) のように未知の人物を繰り返して、それに *dA* を付加することもできる。これは、話し手である A の領域にあるものを擬似的に取り立てているという意味で談話の子題と認定するための一つの要素であるとみなせる。

- (11) A: Dün İstasyon-da Ahmet ile görüş-tü-m.
 yesterday station-LOC A. COM meet-PST-1SG
 「昨日、駅で Ahmet にあったよ。」
- B: a. O da kim? 「その人って誰？」
 b. O kim?
 he who
 c. Ahmet de kim-di (ya)? 「アフメトって誰なの？」
 A. who-COP:PFT DC

文内の主題と共起する接語である *dA* は、文の最初の構成素の後に出現するのが最も普通であるが、他の話題転換子と比較して、文末を含み文中のさまざまな位置に出現することが可能である。他の話題転換子と比べて *dA* の強調の度合いは低く、二つの出来事や状況の間の連続性や結びつきを合図しているとされる (Göksel & Karslake 2005: 401)。 (11) で指摘した機能は、*dA* が談話文法的に重要な役割を果たしており、特に聞き手領域と話し手領域を区別するための語用論的な伝達型の機能を果たしていることの表れであり、主題としての働きの一側面を支持している。本節では *dA* の生起が文末に限らず自由で、文頭の要素にも後続することを指摘することにより、文末という語順と *dA* による表示が互いに独立しており、トルコ語においては通言語的な定義による「主題」が多層的に存在していることを述べた。

3.6. まとめ

トルコ語やチュルク諸語における主題のありかたは、音声的、形態的、統語的、あるいは談話文法も関連しており、総合的な把握が必要になる。従って、トルコ

語ではそもそも主題という概念が有効であるのか、あるいは日本語のような主題が形態的・形式的に明らかな他言語と比較する場合は、主題をどのレベルで捉えるのかに留意する必要がある。3.2 でみたようにトルコ語では、左方転移や右方転移の主題化と関係節化が構文として成立しており、限定された名詞句が述語の後などの右周辺部に生起するのか、文頭などの左周辺部に生起するのかが明確に実現される。Lambrecht (1994: 202-203) ではトルコ語の動詞後置要素がみられる *devrik cümle* (倒置文 = PVC) などについて、主題が最初の原則 (the topic-first principle) に対する反例としており、2.1 で述べた「それについて、何かを述べる」という意味的な一般化だけでは全てを捉えることができず、主題化の概念は典型的に別のタイプを検討する必要がある。3.4 と 3.5 では主題化により数量詞の基本語順が優先されなくなることや、主題を表す *da* が談話に関わる非典型的な機能があることをあわせて指摘し、トルコ語の主題の多層的な側面を述べた。

4. おわりに

主題が形式的に顕著に表示される日本語において、主題はよく認知された文法概念であり、文脈があるテキストだけでなく、属性叙述文や事象叙述文などの文脈がない単独の文にも出現する (cf. 益岡 (編) 2004, Masuoka 2017)。つまり、日本語からみる限り主題は存在して当たり前の概念であると考えてしまうことがある。しかし、トルコ語では主題という概念は 1980 年代まで記述文法の中で中心的な話題になることはなかった。対照研究や類型論的な研究の枠組みの中で、主題や取り立てのような普遍性のある概念に基づく通言語的な研究 (e.g. 益岡 (編) 2004, 野田 (編) 2019, 野田 2021) が近年多くみられるようになってきたが、まず主題という概念が当該言語で適用可能かどうかを慎重に確認する必要がある。トルコ語の主題を考える上で特に顕著なのは、日本語と比較して述語に対して後置されることが頻度的にも高いことと、名詞の所属人称表示に見られるように名詞の限定性を表示する頻度の高い形態的な手段を持つことである。主題化を論じる際には文のレベルだけでなく、談話のレベルでの議論が不可欠になると思われる。トルコ語の右周辺部要素にはまだ不明な点も多い。小説などのテキストデータの中で動詞後置要素として生起する主題と談話の中でみられる韻律的特徴との関連などの実例に基づく考察が必要になるであろう。また、トルコ語だけでなく他のチュルク諸語での動詞後置要素の主題化と韻律的特徴を探ることで、この問題がどの程度一般性を持つかについても考察を広げていく必要がある。

また近年、計算機のモデルで大量のテキストからトピックを抽出することによりトピックを推定するモデルがある。例えばプログラミング言語 R のモジュールの一つである LDA (Latent Dirichlet Allocation: 潜在ディリクレ配分法) によるトピックモデルは、テキストの頻度データを用いて、各テキストが k 個のトピックに属する確率を推定すると同時に、名詞句のトピック内での重要度、確率値を推

定するものである(金 2021)。このような計算機による分析で使われるトピックという概念が、本稿でいう主題と並行的に考えることができるかは、このようなモデルの有効性を考える上で重要なものであるが、別稿に委ねたい。

略語一覧

ACC: accusative, COM: comitative, COP: copula, CT: contrastive topic, DAT: dative, DC: discourse connective, EVD: evidentiality, F: focus, GEN: genitive, IP: Inflectional Phrase, Jp: Japanese, KB: Karachay-Balkar, LOC: locative, MOD: modality, NEG: negative, PFT: perfect, PL: plural, POSS: possessive, PROG: progressive, PRT: participle, PSB: possibility, PST: past, SG: singular, Tr: Turkish, 1: first person, 3: third person

参 考 文 献

- Comrie, Bernard. 1998. “Attributive clauses in Asian Languages: Towards an areal typology”. In Boeder, W. & Schroeder, C. et al. (eds.). *Sprache in Raum und Zeit*. Band 2. Tübingen: Narr. pp.51–60.
- Erguvanli, Eser. 1984. *The Function of Word Order in Turkish Grammar*. California: University of California Press.
- Erguvanli, Eser. 1984. *The Function of Word Order in Turkish Grammar*. Berkeley: University of California Pub.
- Givón, Talmy. 1983. Topic continuity in discourse: An introduction. In Givón, T (ed.). *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Pub. pp.1-42.
- Göksel, Asli. & Karslake, Celia. 2005. *Turkish: A comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Göksel, Asli. & Özsoy, Sumru. 2003. “dA as a focus/topic associated clitic in Turkish”. In Özsoy, A. S. & A. Göksel (eds.). *Lingua, Special edition on Focus in Turkish*. pp.1143–1167.
- Gürer, Asli. 2020. “The Prosody of Aboutness and Contrastive Topics in Turkish”. *Türk Dili ve Edebiyatı Dergisi*, Cilt: 60, Sayı: 2, pp.561–585.
- 林徹. 2019. 「トルコ語のとりたて表現」. 野田 (編). 『主題の対照』. 東京: くろしお出版. pp.219–236.
- Kamali, Beste. 2011. *Topics at the PF interface of Turkish* [Unpublished doctoral dissertation]. Harvard University.
- 金明哲. 2021. 『テキストアナリティクスの基礎と実践』. 東京: 岩波書店
- Kornfilt, Jaklin. 2005. “Asymmetries between pre-verbal and post-verbal scrambling in Turkish”. In Sabel, J. and M. Saito (eds.). *The free word order phenomenon, its syntactic sources and diversity*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter. pp.163–179.
- 久野暉. 1973. 『日本語文法研究』. 東京: 大修館.
- Kuribayashi, Yuu. 2012. “Grammaticalized Topics in Kashkay: The Implication for the relativization of Turkic languages”. In Kincses-Nagy, É. and M. Biacsi (eds.). *The Szeged Conference. Studia uralo-altaica* 49. Szeged: University of Szeged. pp.311–318. (<https://ojs.bibl.u-szeged.hu/index.php/stualtaica/article/view/13682/13538>)
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information structure and sentence form: A theory of topic, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lewis, Geoffrey. 1967. *Turkish Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Li, Charles N. & Sandra A. Thompson.. 1976. “Subject and topic: A new typology of language”. In Charles N. Li (ed.). *Subject and topic*. New York: Academic Press. pp.457–489.
- 益岡隆志 (編). 2004. 『主題の対照』. 東京: くろしお出版.
- Masuoka, Takashi. 2017. “Topic and subject”. In Shibatani, M. Miyagawa, S, H. Noda (eds.). *Handbooks of Japanese Syntax*. Boston/Berlin: Walter de Gruyter. pp.97–122.

野田尚志（編）. 2019. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』. 東京：くろしお出版.

野田尚志. 2021. 「日本語の文の主題と言語類型論」. 窪菌他（編）. 『日本語の研究と言語理論から見た言語類型論』. 東京：開拓社. pp.74–97.

Özsoy, A. Sumru. 2018. “Introduction”. In Özsoy, A. Sumru. (ed.). *Word Order in Turkish*. Natural Language and Linguistics Series vol. 97. Springer. pp.1–38.

Öztürk, Balkız. 2013. “Postverbal constituents in SOV languages”. In M. Sheehan & M. T. Biberauer (eds.). *Theoretical Approaches to Disharmonic Word Orders*. Oxford University Press. pp.270–305.